
幻術士

汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻術士

【NNコード】

N1349F

【作者名】

汐

【あらすじ】

幻術士の少女と護衛役の少女との旅物語。幻術とは魔法を越えた術。なぜ少女は力を求めるか。神の意思に背く行動とは。2人の運命はどう終わりを告げるのか。人々の期待を背負いながら少女2人は旅にでる。見た目は笑顔で、心に不安と秘密を隠しながら・・・

第1話 始まりの風

・・・私は彼女を守りたいと思つた。

彼女は苦しくても笑っていたから

純粋でひたむきだったから

誰よりも優しかったから

神から告げられた 宿命だとしても 運命だとして
ても

絶対死なせない
私の全てを懸けて

今、私は屋上にいます。屋上といつても私の家の屋上です。

爽やかに吹き渡る風が とっても気持ち良いです。

白い大理石の床のうえに一人の少女が立っていた。

少女の髪は薄い茶色で長さは腰まである。

歳は15・6才で瞳は薄い青 頭には、暗い赤のカチューシャをしていた。

同色のワンピース（黒いフリルがついている）の下に白いキャミソールを着ていた。

高級そうな布の質感 大理石の床などを見て

「この少女はお金に何不自由しない家庭で育つたよう見える。

でも彼女の目は 金や物に依存した目でなく、

厳しさや、困難を乗り越えてきた 深く綺麗な瞳だった。

「そろそろだよね・・・」

少女は拳をこぎる。

「緊張も不安もあるけど・・・」

「後悔だけはしていないよ」

「・・・君との約束 絶対守るよ」

屋上での最後の風が吹いた。

・・・うん。大丈夫。

最初で最後の私の旅が 始まろうとしていた。

・・・

頑なな決心 欠けることなく

あり続けるだろう

約束したあの日から

沈む道も 迷い無く 進むだろう

使命を果たすその日まで

第1話 始まりの風（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
感謝感激です。

第2話 静かな決心（前書き）

たくさん内容を修正しました。
すみません。

再び（初めての方も）読んでもらえると
とても嬉しいです。

第2話 静かな決心

広い部屋には白いイスがあり、前には三面鏡が置いてある。

部屋には暖かい日差しが射している。

しかし、冷たい緊張感が部屋に漂っていた。

そこに6人の執事に囲まれている、1人の少女がいた。

少女が人に囲まれ、ぽつんとイスに座っていた。

今日は旅立ちの日。

たくさんの人が見送ってくれる。

期待と応援を込めて

>少女 <

・・・あなたは覚えているでしょうか

・・・

でも 大丈夫です。

この書には 私のこれから記憶が 書き込まれる 予定です

心配しないで良いです

あなたが欲しいものは ここにあります

あと もう少し・・・です

2人が 本当の自分に戻れる日まで

自由になれる日まで・・・

<詩優>

こんにちは。私は詩優と申します。

自己紹介しますと 私は幻術士という立場に

就かせてもらっています。

今、私は式のために執事さん達に

お化粧や、髪をすいてもらつたりしてもらつてます。

お化粧道具がズラーッと並んでいます

装飾品 衣装などなど たくさんあります。

いつもお化粧などした事が無い私は 少し困惑つたりしてます。

今日の式とは旅立ちの式です。 私はこれから旅に出ます。

そして 今日は最後の日・・・です。

決別の意味を込めて 式があります。

私を見送つてもうれる出発式

たくさんの人に見送つてもうれるのせ、すくなく嬉しいです。

大勢の人が見送ってくれる・・・

そんなのは綺麗事だ

みんな 自分が幸せになりたいから。

あなたのためではない

あなたは ただのモノ

みんなに使われ ボロボロになつて 捨てられる

自分にとって 有益だから 使うんだ

もつといいモノを見つけたら

もう 必要ないゴミになる

モノがどんなに人に優しくしたって無駄だ

みんな 裏切られる

邪魔になる

今に分かるさ 今まで見た人の笑顔は 偽りだつて

ボロボロの道具は必要ない

邪魔だ

捨てられたら どんなに役に立つてたって

その道具は 人の記憶に無い

もう 存在価値も理由も記憶も無い

お前はずっと独りだ

記憶の本

偽りの姿

独りぼっち

触れられない想い

記憶の無い少女

届かない声

少女の為の最後の式

お別れ

・・・ ありが・・とひ『

もひろひとの式の意味

誰も口にはしない

見ないフリ 聞こえないフリ

紅い涙と 嘘れた叫び声

‘暗黙の了解’

私は朝倉家の1人娘です。

朝倉家はこの街・・蒼風街あおかぜを治めている街長

代々街長を受け継いでる家系なのです。

・・・ですが今日、私は旅に出ます。

「人々が平和で安らかな日々を送れるような街にしたい。」

微笑んでお父様は夢を語っていました。

優しくて憧れの人です。

次の街長は私・・・でした。ですが、私は街長にはなりません。

あの子との約束・・・だから 今私は、こうして生きているので

す。

初めて私が必要とされた約束。 守りたい 絶対に

私は旅に出ます。

苦しくても 幻術士として生きていこうと

決めました。

…決めていました。

お父様 …。

ごめんなさい。

どうしても譲れない…です。

私は…として生きていきます。

…生きて…いきたいです。

君がいなくとも…

独りになつても

大事な約束だから

絶対守るよ

そのために私は生まれたのだから

私はモノではなく

幻術士として

第2話 静かな決心（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

詩優にとって大切な親友が

次回で登場します。

第3話 悲しみの道

蒼風街の城の大きな外庭の舞台の上

大理石の階段を一步一步上りながら

少女・詩優は歩いて来た。

長い茶色の髪を風になびかせ

黒いリボンで髪を結い

真っ白いシルクの服に身を包み

白いミニスカートに黒いフリル

服に黒いリボンをまきつけ後ろで結んでいる

白いショートブーツ 頭にシルバーのティアラ

真珠の首飾りと黒真珠のイヤリングを身に付け

指には銀色の細い指輪

澄んだ瞳に長い睫まつげ

彼女は一旦目を瞑り

再び目を開いた

彼女の前には七千人の観客

視線は彼女に集中していた。

軽く礼をして声を出した

凛とした声で想いを語った

緊張した様子は無かつた

微笑んで語った

旅への意気込み

その言葉は人々の未来を安心させた

希望を『与えてくれた

今この一瞬 永遠に心に響くだらう

「緊張して、声震えちゃいました・・・」

詩優は深い息を吐いた。

「そんな事ないですよ。」「とても素敵でした。」

詩優を囲んでいる執事達は口をそろえて言った。

「ありがとうございます」

詩優は微笑んで言った。

そして詩優は、いつもの服装に着替えて

小さいリコックを背負つた。

「詩優さん。弥夢みゆさんがいらしゃった様です。」

「本当ですか！」

驚きと笑顔が混じった表情をした。

「・・・失礼します」

ドアが開いた。

そこには12、13歳くらいの少女がいた。

髪は黒 紅い瞳

着物のような服を着ていた。

少女は冷たい瞳をしていた。

「弥夢——」

詩優は抱きついた。

少女は戸惑いながらも、少し微笑んだ。

「……お久しぶりです。」

少女は詩優の前でしか笑わないのだった。

部屋に居た執事に詩優は挨拶をした。

弥夢^{みゆめ}は黙つて、部屋を出るときに軽く会釈をした。

そして2人は話をしながら、歩いた。

詩優は執事に出会いと毎回

「今まで本当にありがとうございました。
これから弥夢^{みゆめ}と2人で頑張ります！」

と笑顔で挨拶したのだった。

玄関で弥夢^{みゆめ}は

「詩優様・・・優歌さまに挨拶はしないのですか？」

詩優は一瞬止まった

「お母様にはちょっと前に、あいさつしたの」

「ありがと。心配してくれて」

照れながら笑つていった。

いつもの笑顔で

弥夢みむだけは知つていた。

詩優と優歌の本当の関係を

「行こう弥夢！」

手をひいて扉を開けた。

扉の向こうには、森が広がつている。

その森の中がこれから進む道

目の前には森　すぐ後ろには自分の家

でも、もう始まっている旅

引き返す事はできない

帰る事の無い故郷

もう振り返る事は一度もなかつた

人々の期待と未来を背負つて

ただ前だけを見つめて

ヒュンツ

ザツ

詩優に目掛けて飛ぶ矢

それを平然にとる少女

2人はもう少女ではない

1人は命を懸け守る 護衛守術士

もう1人は 魔法を越えた術を使いこなす 幻術士

「・・・剣でも槍でも降らせばいい。・・・全て無駄です。」

「闘いは好きではありません・・・話し合う事・・・できませんか？」

2人は知つていて、この道を選択したのだ

悲しみに満ちていの道を

ガガガガツツツツ
ダンツ

詩優が考える世界よりも 世界は厳しく冷たかつた

けれど構わない

その世界を変える為にここにいるのだから

第3話 悲しみの道（後書き）

こつもよつと長くなってしまったしました。

じいじまで読んで下さりありがとうございました。

次回は弥夢視点で書きたこと思っています。

第4話 光と闇の森

「弥夢」

もひ、どんぐらこ歩いただり

この森の中は暗く 足場が悪い

6・7時間は歩いた・・・?

なのに

詩優様はなぜ 疲れていないのである

なぜ あんなに楽しそうに 歩いているのである

この旅は 決して楽しいものではないのに

「詩優様 ・・・ 疲れていませんか?」

今日で23回田の言葉

「全然大丈夫だよ! 弥夢は大丈夫? 疲れてないかな?」

23回田の返答

「・・・私は平氣です・・・けど」

きつと 詩優様は幼い頃から幻術士として

厳しい修行をしてきていたのだろう

体も精神も

この旅は心が強くないと・・・続けられないから

命を狙われる立場だから ズットと氣を張つていかないといけない

・・・それは今日限りでは無く これからズット

心を落ち着かせる事なんて

もう

一瞬もできないの

詩優様は私を見て心配やうな表情をした

けれど

すぐに微笑んで

田を囁つて 私に話てくれた

「私・・・弥夢と旅に出ることができるよかった。」

・

「小さな頃から考えていたの

暗い森の中で

影を照りあはつて

「1人で旅に出るのって 恐いなって」

やさしい 光が 樹に灯り

「旅に出るのが憂鬱で 不安だったの」

「・・・とても重いものに感じたの」

花に たくさん 降り注ぎ

夜道を 照らす

「弥夢が一緒にいてくれるから この旅が・・・楽しいんだよ。」

空も 樹も 花も 鳥も 忘れずに

「弥夢がいるから この旅でも

綺麗だなって 気付くことができるんだよ」

暖かで 広かな 光

「こんな私だけど」

「・・・弥夢 よろしくね」

風が吹き 華が舞つた

夜の月にも負けないぐらい

綺麗な夜の光

闇夜を照らす 影と光が唄う

切なく 寂しい 命のうた

私は 嬉しさと驚きが混じつて

すぐに声が出せなかつた。

涙が目に溜まつた

どんなに悔しくても 辛くとも 悲しくとも

ずっと流さなかつた涙

涙を堪えるのには慣れていて

涙すことを忘れていた。

そのうち 堪えなくとも
流れなくなつた。

もつ 流す必要が無いって分かったから

だから

初めてだつた 嬉しさで涙を流すことは

「・・・あいつ・・・といひや・・・います」

声が震えて小さく細い声しか出なかつた

涙が溢れた

「あいつがどうは わたしのセリフだよー」

詩優様は手に小さな光を浮かばせた

「はいっ 弥夢にあげる」

その手を差し出した

その光を掴もうとしたら

光は空に溶けて

風になつた

私は手を見た

腕に銀色のブレスレットがついていた

白い粒が光りだした

「おそろいなの」

について詩優様は笑つた

樹の光 花の光 開夜に浮かぶ光

光のブレスレット

それらは 全て幻

詩優様のつくつた 幻

詩優様が昔 言っていた言葉

「攻撃用の幻術より

幻を作る方が難しくないしね 私 好きなんだ」

・・・でも どうしてですか

平和主義で優しいあなたが

なぜ 幻術士になる事を 望んだのですか？

その偉大で強力な力は

何に使つのですか？

あなたがこれからする事は

分かりません・・・

けれど

疑いは全く抱いだきません

あなたの行動には理由があると

分かつています・・・

だから

あなたが私を消そうとしても

私が死ぬことになつても

私は あなたを守るだけです

ただ それだけ・・・です

あなたは光

私は闇

私達は 相容れぬ関係だから

第4話 光と闇の森（後書き）

「うーん、でも読んでトトちつてありがとうござんなあ！」

次も森の中での話を書いひとつと思こます。

第5話 兎と櫻華（前編）

詩優の心情を付けたしました。

読んでもらえれば嬉しいです。

第5話 鬼と薔薇華

森の中を2人の少女が歩いていた。

夜は明け 暖かい陽が射し始めていた。

昨夜は歩き続けていたが 村には辿り着かなかつた。

なので 2人は持ってきた パンを食べ

大きな木の下で眠つた。

まだ疲れは残つていたが 朝には充分に体力が回復していた。

「おはよー 弥夢」

詩優は眠たそうな声で挨拶をした。

「おはようございます・・・」

振り向いて 軽く会釈をした。

その後 弥夢は守術を使って 結界を張つていた。

目を瞑り 澄んだ声で呪文を唱えた。

「・・・我に闇の力を『与えたまえ』

「魔を反射し 力を半減せよ

霧と影で 壁を創り 包み 守れ・・・」

黒い影が詩優を包んだ

その頃 詩優は木陰で休んで 小鳥と兎と遊んでいた。

「ふわふわー もふもふですー」

「」ぐきゅー

「可愛ーーーーーーーー

「ひざを膝にのせて 肩に小鳥をのせていた。

「ひざを撫でながら 幸せな時間を過ごしていた。

遠て昔を思て出すよつこ・・・

弥夢は結界を張り終わった後 詩優を探していた。

詩優は眠っていた。

草の緑と花にまぎれながら

昨夜の 多数の光 光の樹 光の華

「・・・幻術の使いすぎ・・でしょうか

弥夢は不安そうな表情した

不安と同時に 空は動く

雲は流れる

曇り空から 紅い夕日へと

迷いの想いを 断ち切るよう

弥夢は 紅い瞳を空に向けた

「昨日みたいに もう 迷つたりしません。」

「・・・詩優様 昨日はありがとうございました。」

弥夢は深く頭を下げた。

風が吹き渡り 少女の短い黒髪が 風に揺れた

もう・・大丈夫です

あなたのくれた 光があるから

<詩優>

・・・

ん・・・あれ　リリリリ・・・?

なんか　ふかふかしてゐ・・・

草の上にいたのに

よこしょつと・・・

この部屋・・置かれている家具が少し小さめです。

可愛いお部屋だなー。

・・・

・・・どうだろ　リリ?

ヒリヒリ　ヒリヒリ

力チャ　キイイ

「お休みになられましたか?」

「

田の前に 服を着たつやわらか

黒いストーブに黒いネクタイ

耳がピタリとして 可愛いです。

でもお喋りができるんですね すいこです。

「森の中でお休みになられていたので

弥夢さんが宿を探していたところ、私が通りかかったものですから

私達の村へ案内させて頂きました。」

「あ そつなんですか！ お世話になりました。

眠って疲れがとれました。」

「わわわわんは笑って

「それはよかったです！」

あ んと 弥夢さんほひります。

弥夢さん心配してしまったよ。」

ぴっこ ぴっこ ぴっこ

といじといじといじ

ひねりかんこひこひくと・・・

そこには弥夢が 小さな木の椅子に座つていました。

「あの 詩優様 体調は・・・どうでしょうか?」

「眠つてすつきりしました。『ごめん弥夢。心配かけて・・・』

ぴっこ ぴっこ ぴっこ

「お二人様! お食事の準備ができましたので

どうぞ召し上がってください!」

「お食事・・・ですか?」

「はい! 幻術士様の旅の応援をしたいと言つ事で

『駆走を用意させて頂きました!』

「・・・迷惑ではないでしょうか?」

弥夢はもう一度と囁きました。

「いえいえ 大歓迎です！」

(・・・なんでこんなに優しくしてくれるんだろうね？)

私は小さな声で
弥夢に聞いてみた。

(確かに気になります・・・けれど その前に詩優様は 動物が話せるることは

気にならないのでしょうか？）

そういうば
そういうですね・・・

(んー。あんまり気にならないです。)

(そう・・・ですか)

弥夢は視線を「つむぎさん」に向か

「なぜこんなに良くして貰えるのか、私には疑問です。

幻術士とはたくさん的人に祝福される立場では、無いと思います。
・。」

そう・・・。

弥夢の言つ通りです。

「・・・何か事情か頼み事があるのでしあつか」

「つむぎさん」に弥夢は聞きました。

「私たちで出来ることがあったら何でもあるよ。」

「つむぎさん」は慌てました。

「・・・」

「おつがとわざれこます。」

「わざわんは 少し間を空けて ペコっとお辞儀をされました。

「わざりです。」

キキイイイイ 大きな扉が開かれました。

扉の向こうには 広い会場になつていて

大きなテーブルに数々のお食事。

その向こうには ぱたぱたと口钗姿のわざわん達が

パンを焼いたり ケーキに飾りをつけたりしてました。

白いふわふわのわざわん 灰色がベースで白のラインが入つてい
るわざわん

黒のふわふわわざわん 可愛いです。／＼／

「じりそ む座りになつてください。」

私達は椅子に座つて テーブルの上のお食事を頂きました。

熱々のマカロニグラタン 新鮮な野菜のサラダ まろやかな味のローンポタージュ

焼きたてのフランスパン サクサクのチョコクッキー 甘酸っぱいチェリーパイ

どれも美味しかったです！

「うれしかったました。」

「・・・うれしかったました。」

「あと うれしあなた産ごどりがわ。」

「うれしかったよ。白い箱を渡してくれました。」

「うれしかった。う親切にありがとうございました。」

「いじるー 詩優さん 弥夢さん 頑張つてください。」

「はい。頑張りますー！」

「うれしかったよ なにかお返しきれないかな・・・

「…。私にできる事ありませんか？」

思つたこと　すべに声に出してしまった。

言った後　後悔した。

私にできること……。

ないかも知れない

幻術士として生きることしか

・・・その使命しか　無いと思つていた。

ずっと　みんなの役に立てなかつたから

寂しかつた。　怖かつた。

みんなより頭の回転が遅くて

運動もできなくて

人見知りが激しくて

何をするにも不器用で 独りだった私

必要とされたかった。

誰でも良かった。

1人でも 私が役に立てる人がいる事を願った。

・ ・ でも

『・ ・ お前になにができるんだ?』

・ ・ あ

その通りだ わたしは・ ・

無力・・・ですね

いろんな考えが頭の中を 涡を巻いて

体が震えていた 目が熱くなつて ひどく頭痛がした

この世界から 逃げだしたくなつた

・・・

分かつてる

分かつてるんだ

こういう時は 息を吸つて 真っ白に
すればいい。

役に立てるかよりも

役に立とうと努力することが大事

心の中で何度も繰り返す

結果よりも過程が大事

失敗することにも 学べることがある

うん ··· 大丈夫

そして 私は笑う

いつもの笑顔で

一瞬の空白は終わり

時は流れる

「わざわざびっくりしてきました。

その後 少し考えて

「・・・いいのでしょうか

よかったです。」

「・・・まさに喜んで。」

「・・・もし旅の途中に見かけたらここでいのですが。」

「レイサンローズ靈園華の花をみたら

教えてもらひませとか?」

靈園華 といふと 神様の涙とも言われる伝説の 花だよね

たしか 花びらの色は 青緑で

小さこ花・・・

「あの きれいな紫色の花ですね。」

「承知しました。」

「宜しく・・・お願こじま。」

く
弥夢

花・・・

なぜあの兎は　あの花を探しているのだろう

そんな事を考えながら　歩いていた。

兎桜村を出よつとあるとき

チエリー

白と黒のぶちの兎が通った。

その時　詩優様は凍りついた表情をしました。

「・・・どうかされましたか」

「・・・」

「やつぱり・・・やつなの?」

その時、兎は 姿を消した。

「・・・シルア」

「・・・」めさん

詩優様は戸惑いを隠せない表情だった。

あの兔は・・・何だったのだろう

・・・僕の事覚えてるのかな

君と過ごした日々 幸せだったよ

君が探していたあの花 僕 探しているんだ

見つけてその花を育てて

一緒に花畠を作りうつて言つてくれたよね

でも

その約束も・・忘れてしまったかな

やつぱり　君の瞳はあの日から　変わっていないね

すゞく懐かしかった

僕　あの花を探しに　また　世界を渡るんだ

・・・あきらめないよ

旅の途中で会えたらしいな。

バイバイ

月那^{ルナ}

第5話 兎と墨華（後書き）

「いやあで読んでくださいあります！」

今回の少し謎でした詩優と兎の関係は 少しあとに書く予定です。

次回は 新しいキャラが出来ます。
宜しければ見てください。

第6話 小さな祈り（前書き）

旅のきっかけとなる話です。

雪の日の少女の話です。

書き直しをしたので再び読んでもらえれば
嬉しいです。^ ^

第6話 小さな祈り

『・・・おまえの負けだ　お前はもう必要ない。

モノとして一生　生きろ。』

いつも月を見ながら泣いていた

夜風にあたることが　心地よくて　いつも外にいて

掃除人として　ずっと働いていた　あの頃

掃除人としか居場所がなかつたから

人として　必要されなくなつたから

モノになつて働くんだ。

悲しい決心かもしれないけど

まだ諦めたく無かつたんだ

・・・

ただ 諦めが悪いだけ

だよね

その日から私は働いた。

夜遅くまで働いて 疲れたら 冷たい床で横になつて

毎日 每日・・・

体調悪くなつても ずっと働いて

限界・・・だった。体が動かなかつた。動かせなかつた。

もう モノとしての価値も無いんだ。

生きてても仕方がないね。

倒れている少女の近くに 人が近づいた。

瞳はただ 少女を睨みつけていた。

あざ笑いながら 少女に言葉をかけた。

残酷な真実を

真相を聞かされてから 少女は雪に捨てられた

真相は 少女の心を踏みにじるような話だった。

冷たい

痛い

「・・・ん?」

少女が捨てられてから5時間は経過していた。

真っ白い雪が 辺り一面に広がっている。

何もかもが凍りつきそうな気温だった。

だれかがいる 近づいてくる そばにくる

わたしを見ないで

捨てられて モノとなつた私を

青年は立ち止まつた

青年は黒いコートに 灰色と黒のチェックのマフラーをして、瞳の色は深い青で 髪は綺麗な銀髪だった。

髪に霜、雪が付いていた。吐く息は白い。

今日も この街は凍えるような寒ねだ。

公園のベンチの近くの雪に沈んでいる何かを見て

不思議に思い 青年は近寄つた

あれ何だ・・・?

近づいてみると 茶色の髪が見えた

それは 白い服を着た少女だった。

少女は皿を握つて横たわっていた。

8～10歳くらいで

雪に負けないくらい 白く透き通つた顔色だった

「・・・」

少年は 少女の髪や顔に付いた雪を払つ

「・・・おーい」

・・・

「・・・生きてんのか？」

少女は小さく口をついた

瞳からは 涙が流れていた 涙は頬を伝つて雪に滲む。

少女は泣いていた

・・・

「何してん・・・だよ」

体を揺らしてみる

無反応

・・

違う

目を覚まして

瞳をこっちに向けた

真っ黒な瞳の色

虚ろな瞳 その瞳は どこまでも遠くを見ていた

なにもかもが終わってしまった目

生気がまったく感じない目

その瞳から 溢れ出す涙

こんな雪の中埋もれて

独りで涙を流す 少女

全身雪を覆い被つて

頬や手は 寒さで赤くなつて 指先は凍つっていた

顔色は真つ青 冷たく 死んでいるよつた瞳

青年は驚きを隠せず

何歩か 後ずさりをした。

その姿を見て 胸が裂ける様な想いだった。

消えそうな声で ぽつんと言つた

「・・・寂しい」

心からの悲しみが、田に浮かんだ

「悲しくて・・・痛い」

「痛い・・・苦しいよ・・・つ

ぼうぼうと涙を零した。

息は荒く　体は震えていた

白く細い手を胸に寄せて、願つよつて手を組んだ。

「か・・・ま」

小さい声だった。

「？　鎌・・・」

「神・・・様」

願つた手を　強く強く握っていた

こいつに何があったのか 僕は知らない

でも この状況を見て 思うことは

こいつは独りだったんだ。

こいつが頼れるのは

親でも 仲間だまでもなく

触ることもできない

見ることもできない

不確かな存在

聞くことも 話すことも出来ない 遠い存在

神・・・か

神に 見捨てられたとか裏切られたとか

憎んでる奴 腐るほどいんのにな・・・

お前は 疑わないのかよ

・・・

少女が小さく囁いた

「神様・・・ありが・・・と」

「こんな・・・私を生かして・・・くれて」

「まだ生きてるんだよ・・・

あともう少し 綺麗な雪を見たい」と・・・でもね

・・・

お前は幸せにしてほしいから祈るんじゃなくて

感謝・・・してたんだな

青年は深いため息をついた。

「のままじゃ死ぬよな……

「……しうがねえか

俺は 雪の中に沈んでいる体を持ち上げた

・
・
軽い

「……つめてーな

少女は顔を向けた

「……

「だ……れ……？」

お前をこののも どうだろ？

言つたといひで なんにもなんないし。

「んー・・・そつだな。」

軽くジョーク 半分本気。

「お前をせりつていへ 誘拐犯。」

「・・・？」

「いつが守る」ことが出来るなら

誘拐犯になつて 捕まつても 後悔しない。

・・・放つて置けないしな。

・・・。

やつぱり これって

誘拐・・・になるんだろうな

なんでこんなに こいつが 気になるのか

自分でも分かんねえけど 勝手に体が動いていたんだ

きっと

ただこいつの笑顔が見たかった。

守りたかったんだ と思つ。

無垢な瞳の少女を連れて、青年は歩き出した。

少女と暮らしす生活が始まる。

それから

少女は、頑なな閉ざした心を

青年に少しづつ心を開いていった。

少女は笑うようになった。

青年も少女の笑顔に癒されていた。

幸せが始まった。

幸せの始まりがあるの子の

旅の目的となつた理由。

けど

幸せな日々は、

けして

長くは続かなかつた

第6話 小さな祈り（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。
次は旅の続きを書こうと思います。

弥夢が詩優と接している時とは違つ
弥夢が見れると思います。

次回も宜しければ見て下さー。

第7話 暗闇の残影（前書き）

弥夢中心の話です。

第7話 暗闇の残影

久々の綺麗な青い空だった。

少女2人は旅を続けていた。

幻術士といつても詩優は

まだ幻術しか使えない。この世界を助けられる力は

まだもっていない

幻術士は旅で知識と新たな術を学ぶ

それが本来の目的である

幻術を学ぶには

幻術を極める者

『幻師』が幻術士を鍛え、学ばせてきた。

その旅で築き上げた 偉大な力を

幻術士は個人の自由な力で 力を放出する

その者の考える世界の救い方で

その力の使い方で

神 勇者 魔王 死神

など 多様な名で呼ばれる 幻術士

次の幻術士は何と呼ばれるだろつか

2人は 森を超え 兎の村を超えた先にある

魔力を感じさせる 暗闇の古都 ルースメカルドに向かっていた。

そう、そこには『幻師』がいた。

コシコシ コシコシ ガララララララ

詩優は大きな黒い門を開けた。

門には重い魔力が含まれていた。

だが 詩優には普通の扉と同じように

躊躇ためらい無く開けた。

「到着ですー。」

詩優は 息を静かに吐いて背伸びをした。

「・・・辿り着きました」

弥夢はいつもと変わらず 無表情だった。

弥夢が詩優に顔を向けた。

心配しながら 真剣な目で詩優を見つめた

「大丈夫だよ・・・頑張る。」

弥夢は視線を前に向け 頷いた。

そして2人は 門を潜り、ダーニング漆黒城に向けて

歩き出した。

漆黒城 そこには幻師がいる

真つ暗で広い城の中で 永遠待つずっとている

街中には 暗い表情の人々がたくさんの人があった。

沈んだ目で 疲れきっている表情だった。

お店は多数並んでいるものの
これやかの活気は無かつた。

弥夢は空を見た

(朝はあんなに綺麗な空だったのに

いじむ・・・黒く重い雲。

邪悪な何かが街を包んでいる・・・危険だ)

弥夢は歩きながら 空気を指でなぞった。

強い結界を張るためだつた。

弥夢の薄暗い紅の瞳は 綺麗な紅になつた。

「・・・闇の神よ 鋼鉄の影で守れ

魔の力よ 闇に生まれ 闇に還れ」

指でなぞつた場所が 黒く光りだした。

弥夢が書いた図形と魔字は大きな闇となり

詩優の周りの壁になつた。

人々の視線は一気に弥夢に向いた。

ざわめきが聞こえた。

少女とは思えないような、強力な魔氣

そして 上級の守術だからだった。

その瞬間

光のような速さで貫く 炎の矢が飛んだ。

矢は消えた。

詩優の3メートル離れたところで
チリとなつた。

瞬速で振り向いた

そして

弥夢は冷たい瞳で一点をみつめた

誰もが血の気が無くなる様な瞳で

矢を放つた相手の瞳に向けて

相手は男だった。

男は心臓が凍りついた

時が止まつたように

男に見えるのは白黒モノクロの景色と

紅い瞳の少女だけだつた。

男は顔を真っ青にし、すぐに田をそらし去つた

「・・・何がしたいんだ」

弥夢は静かに呴いた。

クスクスと笑い声が聞こえた

【面白い子達がきたね・・・】

【僕の魔気に耐えらるかな。】

・・・

【・・・その前に】

ゴッホーコレナイカモ

第7話 暗闇の残影（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
漆黒城の続きを書くと思います。

詩優の過去が少し分かると思ってます。
読んで下されば嬉しいです。

第8話 永遠の契約

「大きいお城だねー」

目の前は漆黒城^{ダークリング}が立ちはだかっていた。

期待を膨らませて いる詩優とは違い

弥夢は冷ややかな表情で 強く拳を握っていた。

「緊張・・・しないのですか？」

弥夢は聞いた。

詩優はにっこり微笑んで

「緊張はね するよ。

だけどね これは 私の望んだ使命なんだ。

出来る限りの事 精一杯したいな。」

「それに 弥夢がいるから・・・頑張れるよ。」

小さく詩優は呟いた。

「・・・。」

弥夢は顔を赤くして 下をうつ向いた。

「私・・・中に入つてみます・・・」

黒く短い髪をなびかせ フツと前へ進んだ。

白と黒の長い階段を 弥夢は一段一段上つた。

螺旋状の階段で 一つ一つの階段に汚れ一つ無かつた。

頂上に着くまで 弥夢は息を乱すこととは無く、

1つ呟いた

「6千6百六十段・・・」

階段に仕掛けの魔術はかけられてない・・・

けど 相手は幻師だ

どんな幻術をかけられているか分からぬ

「詩優様！ 魔術で体力向上しますか・・・？」

弥夢はいつもより 大きな声を出した。

「大丈夫ーだよー！」

返事が聞こえると同時に 多数の光が宙に舞つた

ポワポワ シュンツ

「・・・よつと」

詩優は 階段に足を掛けた。

一瞬の出来事だった。

光が詩優を包み 体を縮めて飛び上がったように

弥夢は見えた。

常人には 瞬間移動をしたように見える速さだった。

弥夢は 幻術に魔術は超えられない事はわかつていた

わかつっていたが その凄さに驚きを隠せなかつた。

「凄い……です。」

「えへへ ありがとー。」

【・・・】

【・・・もう来たんだ】

【・・・疾風幻師以来だよ。^{アイツ}】

その速さで 来たのは 【

詩優は扉の取つ手を引いた

「んー。開かないな。」

「封印でもしてあるのでしょうか・・・」

「弥夢つて解除の呪文 知ってるかな?」

「鍵開けと 毒・呪い・混乱解除の術

警報機解除 爆弾解除しか・・・知りません

「そつかー。」

2人は沈黙し 方法を考えた。

「・・・」

「あ！」

突然 詩優が声を上げた。

「『めん弥夢。』の言葉忘れてた。」

詩優は扉に手を当てた。

「・・・我が名において共鳴せよ

六つの魂が揃う時 神の力が解放される・・・」

ジユウウウウウウンンンツツツツ

急に地面が激しく揺れた。

扉は溶け始め 固まり出した。

固まつた部分は石と化した。

「詩優様・・・そのままでは 手が・・・」

弥夢は立つことで精一杯だった。

手の寸前まで石化は進んでいる。

「・・・離して下せー。」

床はほとんど崩れ落ちていた。

詩優何一つ変わらない表情だった。

・・・！

指先は石化してしまつた。

「心配してくれて・・・ありがと弥夢。」

痛・・・つ でも思ひ出した・・・の

『ハリで僕等は劍めよ』

約束といひ葉では 優しくされる

忠誠といひ葉では 憂鬱になる

束縛といひ葉では 意味が無い

絆 といひ葉では 綺麗すぎる

信頼といつ言葉では 偽善になる

たとえ全身が碎け散つて舞おうが

切れない 薄れない 消えないもの

永遠に僕等は 共に生きる事を願おう

想い 祈り 叶えよう

神の力を与えられた者として

使命を果たそう

「」で僕等は創めよ
ひみつ

永遠の誓い 魂で結ばれた契約

異なる者達 同じ魂の繋がり

永遠の魂の契約
ソウルリンク

第8話 永遠の契約（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。
次は、雪の話の続きを書こうと思います。
次回も宜しくお願いします。

第9話 雪解けの心（前書き）

雪の日の少女と青年の話の続きです。

この話は、謎が多いのですが、詩優と大きく関係している話です。
少しずつ謎を明かしていくので、
秘密を予測して読んでもらえれば、嬉しいです。

第9話 雪解けの心

凍えるよに寒い雪の時の話・・・

青年は少女を家に連れてきた。

部屋は広く 綺麗に整頓されていた 家具もシンプルなものが多い。
部屋の中心に置かれた 白く長いテーブルには 分厚い本が何冊か
置かれていた。

その近くで黒いソファに座って本を読む青年と

敷き布団で横たわっている少女がいた。

・

ペラ ペラ

「・・・」

「・・・？」

少女は目を開け 周りを見渡した。

見慣れない景色に困惑っていた。

「あ・・・」少女は上半身だけ起き上がりつた。

「あの・・・すみません」

本を読んでいる青年に話しかけた。

「ん? ああ 起きたか」

少女は小さく頷いた。

「・・・」でどうか?」

「」
「」俺ん家ちで、なんかお前 死にそーだつたから拉致つてきた。

「死にそー・・・ですか?」

「あんな雪に埋もれ続けたら 普通死ぬぞ?」

「・・・はい」

「お前すげー冷たかつたしな。・・・まだ寒いか?」

「あ・・・少し肌寒い・・・です。」

青年は机に本を置いて、立ち上がつた。

立ち上がり歩き出した先は、台所だった。

食器棚から コーヒーカップを取り 沸かしていたお湯を

コーヒーカップの中に注いだ。

コポコポ コポコポ

「・・・」

少女はしばらく黙っていた。

青年はお湯の中に ココアの粉と砂糖を入れて、混ぜていた。

「私・・・誘拐されたのですか？」

「んまあそーゆーとこだな。」

青年は少女に近づいて

少女の頭に手をぽんと置いた。

「帰れる場所・・・無かつたんだろ」

「いいで良ければ 居てもいいからな。」

青年はテーブルにココアを置いた。

「ほら 飲めよ」

「・・・」

少女は俯いた

そして 泣きそづな声で言つた

「・・・ないです。」

「ん?」

「帰れる場所・・・」

少女は1粒涙を流した。

少女は悲しみを抱えることが出来なかつた。

笑つていた事が遠いことのよつに感じていた。

「幸せの日々には もう 戻れない、

不安に押しつぶされそだつた。」

心が重くて 息が乱れて

自分が自分で無くなる気がした。

少女を見つめながら

青年は 蹊^{とまい}躇^{じゆ}いなく言った

「だから ここにいればいいだろ?」

少女はそれを必死に反抗しようとしました。

『ここに居ていいいんだよ。』

だって君は選ばれた者だから・・・他のモノとは違つ

幸せにしていきたいせいばい。

・・・しかし

ある時期が来て 君が 負けたら・・・

頭に激痛と痛々しい記憶が 閃光のよひに想ひ出された

うつ・・・つ

頭に血が昇った

そんな簡単に答えを出さないで欲しかった。

自分の・・・本当の私の価値を知らないから

そんな無責任な事が言えるんだ。

恩を着せよつとしているのか

偽善・・・だらう

そんな優しいフリをしたって無駄だ

もう 騙されない

・・・

暖かい布団に毛布

温かいココア

違う 誰

・・・わかってる

わかってるよ

この人は助けてくれた

それに とても優しくしてくれる

だけど 優しさを信じるのは怖い

いつか 落されるのに

・

だからって この人を責めるのは・・・愚かな行為

こんな感じじゃ駄目・・・だ

少女は冷静さを取り戻すように

息を整え 田を見据えた

「でも、迷惑になりますしそれに『俺が ここに連れて来たんだ』

青年の言葉に一瞬戸惑った。

あまりに堂々と喋っていたから

「……誘拐したつていつたろ 迷惑なんか思つてない」

青年の言葉は 偽りの言葉や 飾った言葉でなく

今まで聞いたことの無い

・・・なんかよく分かんねえけど

お前が泣くの 見たくないながつたし

本当の心の声

雪に埋もれて死なせたくなかつた

笑ってくれればいいと思つた

不器用な優しい言葉

お前に ここにいて欲しい

青年の真っ直ぐな瞳に

少女は青年が偽りを言つてゐるとは思えなかつた

・・・

なんで

どうして

なんでそんなに簡単に言つてくれるんだひつ

涙が止まって 心が揺れた

少女は驚いて息を呑んだ

自分を見捨てずに助けてくれて

・・・

ここに居てもいい・・・

そんな言葉をかけてくれる人 いなかつた

みんな邪魔だつて言つていた

私のこと いらないつて

・・・ そうだよね

いらないよね。こんなモノなんか

最後の存在理由が無くなつた時

本当の無価値になつたのに

それでも私を拾つてくれた人

その人の為に 何かしてあげたい

いつか捨てられるかもしれないけど

その日まで 何かしたい・・・

あなたに別れを告げるまで

あなたの優しさに甘えてもいいですか

自分を必要としてくれる人が いること

それが 少女の幸せだった

優しさで心が満たされて

同時に悲しみが溢れてしかたがなかつた

その気持ちを抑えきれずに、青年の背中に抱きついた

「？？」

青年は驚き戸惑つた後に

少し笑つた。

「・・・お前 名前は?」

少女はしげみついたまま答えた

「月那・・・朝倉月那^{ルナ}」

「ん。 月那・・・か よろしくな。」

ずっと子どもっぽく無かった少女・・・

月那がやっと子どもに見えた

自分に抱きつく姿が、幼くて可愛かった

そして 少女が自分を頼ってくれた

なんか照れくさくて

なんともいえない思いが

青年の心に込み上げて来ていた。

深く心に刺さる

氷の破片

人の心して 溶け 泪になる

第9話 書解けの心（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。
次回も宜しければ読んでみて下さい。

第10話 間のカケラ（前書き）

旅物語です。

第10話 間の力ケラ

痛さと同時に思い出された記憶

全てが始まる前の記憶

〈詩優〉

そつ・・・だったよね

私 独りじゃなかつたね

みんな 傍に居てくれてたよね

へこたれてたよね 私

ごめんね みんな

もう 本当に大丈夫

負けたりしないよ

みんながいるから 頑張れるよ

黒い大理石の床に 詩優は倒れていた

「大丈夫？」

目の前には 金髪の少年

手を差し伸べた

詩優は少年の瞳を見つめた。

「ありがとうございます 幻師様」

手をとつて 起き上がる

少年は くすくすと笑って

「やつと 思い出してくれたのにそれはないよね」

詩優もふつと笑った。

「今までどうりの呼び名でいいよ。」

少年は言った。

詩優は頷いて言った。

「・・・久しぶり瑠璃

「？」

2人は出会った

停まった時間は動き出した

永遠の契約の再開だつた

永い永い時が経ち 詩優の記憶は薄れていつたが

再び記憶を取り戻した。

少年・・・瑠璃は喋り出した。

「それにしてもさ いい子に出会ったよね。」

「？」

詩優は不思議そうに 首を傾げた。

「あの黒髪の子だよ

詩優は 謎が解けて

「あ！ 弥夢の事ですか」

「うん。 ヘー・・・弥夢っていうんだ。」

少年はにっこり笑って

「す、じ、よ あの子12歳なのに・・・

いや 大人としても 驚くぐらい能力が高い

一番可笑しいのは 守術士なのに

魔術の方が相当凄いよ。」

瑠璃は暗い瞳で

「君にも言えない何かを 隠してるんだよ

城の中の空気が凍りついた。

詩優は悲しそうな表情で言った

「そり・・・ですか」

「でも 何よりも君を信じて

守りたいとしてる。

・・・いい友達に会えたね。」

瑠璃の言葉に詩優は大きく頷いた。

そして満面の笑みを浮かべた。

「あの子もここに呼ばぼうか。」

一瞬の内にして、床に大きな幻陣を描いた。

その幻陣から黒い光が浮かびだして

弥夢が現れた。

「・・・」

弥夢は瞑つていた目を開けた。

綺麗な紅の瞳だった。

瑠雨は一礼して

「初めまして 弥夢」

弥夢は凜とした声で

「幻師様・・・初めまして

幻術士の護衛役になりました

護衛守術士の弥夢と申します。」

瑠雨は笑って言った。

「（こ）寧にありがとうございます。」

でも「（こ）寧は 習つた作法をしなくて良い。

君は頑らしくしてくれれば良い。

他の幻師もそれを望んでいる。」

瑠雨は 見た目に似合わない

大人びた声で言った。

弥夢は戸惑いながら言った。

「……いいのでしょうか

瑠雨は頷き

「君たちが教えられた作法は

僕等が考えたものではない。 僕らが人に伝えたのは

僕等が本当に存在している事を伝えたかったんだ。

そうしないと幻術士は会いにこなかつたからね。

でも人は、僕らを師といい。 崇めたてている

幻術士と僕達は 仲間・・・友達だ。」

瑠雨は手を差し伸べて

「君も もちろん友達だよ。 弥夢」

瑠雨の深い言葉を聴いた弥夢は

その言葉を信じ

弥夢も手を伸ばした。

「……よひしく 瑞雨さん」

同じ年ぐらいの姿の2人だが

2人とも見かけよりもずっと大人びていた。

瑞雨は にっこり笑って 弥夢の耳のそばで囁いた。

(その綺麗な紅い瞳……隠さないとばれちゃうよ)

弥夢は はつとなつて 紅い瞳を暗い赤の瞳に戻した。

「あ あり……がと」

弥夢は気付かれている事を不安に思つた。

不安と共に瑞雨に恐怖を抱いた。

「どういたしまして」

そんな感情を思われているにも関わらず

瑞雨は屈託の無い笑顔を見せた。

瑞雨は急に詩優に目を向けて

「^{ゆう}に僕の力あげるよ」

と言つて 手招きした。

「あ うん。」

詩優と瑠璃は手を重ねた。

瑠璃の手には血が通つていなかつた。

「僕が幻術士だつた頃は死神のよつた子供もと呼ばれてたよ。」

「・・・」

「優は使わないと思つけど 旅には必要だからね。」

大幻術の四 + 暗黒の力 + を渡すよ。 全てを消せる力・・・」

「^{ソウルリンク}永遠の契約者が揃つた時 また会おう。」

瑠璃は少しずつ黒い影となつて薄れていった。

「うん・・・またね

詩優は名残惜しく呟いた。

【弥夢 バイバイ】

弥夢は影を見つめて言った。

「はい・・・やようなら。」

残影は残らず消えた。

・
・

弥夢は悲しみを感じていた。

2人目の友達だったから

それに 同じ闇を抱えていた者だったから

お互い感じていた

自分に近い存在で 惹かれあつていた。

でも 弥夢はもう会えないと語った。

彼は永遠の契約だ

似ているが違う存在・・・

彼の言葉を思い返していた。

会えないと悟った理由

またね と バイバイ の違い

ただそれだけなのに なぜか 深く遠く感じた。

心からの悲しみは溢れたが

瞳に涙は無かつた。

涙はもう 流さないと決めたから

・・・

心を通わした者よ

馴れ合ひは嫌らない

傍に居なくていい

ただお互ひを忘れないければいい

その記憶も留めなくていい

在った事が分かればいい

形となりて

記憶の象徴 ただ在りつけける

・

・

弥夢の腕には

詩優からもひつた 白い光のブレスレットと

黒い十字架のアクセサリーがついていた。

第10話 閻の力ケラ（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。
次回は詩優の過去と関係する兎が出ます。
宜しければ見てください。

第11話 月那の日記

(月那)

私を拾つてくれた人・・・彼は雪斗ゆきとという人だつた。

19歳で、独り暮らし 学校の教師をしていろと言つていた。

「他に聞きたい事はあるか?」

と言つたので、散々迷つて質問を考えたのに

その時には、本を読み耽つっていた。

だから、聞けなかつた。

・・・

華月の3日 晴れ

日記を書くことにしたのです。

ノートとペンを渡されました。

字の勉強をするからです。

雪斗さんが字を教えてくれました。

でも私は昔に一応習ったのです。

あまりに優しく教えてくれるので、

教えてもらいました。

教えてもらっていました時に

「なんだ お前字書けんのかよ」

と言われ 気くじとしたのですが

その後に「他の文字も書けるのか?」

と言われ 「十一ヶ国しか知りません」

と答えたなら雪斗さんは驚かれました。

そんなに少ないのかな・・・少し傷つきました。

でも、これから覚えればいいんだよね。

今度教えてもらいたいな。

最近へこんでいました。

雪斗さん「お前は学校にいかなくていい。」

と言われたからです。

私は行く必要がないからなんだ。と思いました。

勉強をして私も雪斗さんみたいに

教師になれたらいな。と思つていたのに・・・

【華月 13日 晴れ】

今田私はへこんでいる理由を雪斗さん

聞かれました。

私は学校に行く資格もない自分が

情けなくて、落ち込んでいるとこつたら

雪斗さんはそこでふつと笑いました。

その時はなぜ笑っているのか分からなくて
びっくりしたのですが

「お前は学校で留つことを もう

知っていたから 行く必要がないって言つたんだ。」

「そんなに行きたいなら

行つてもいいけど 暇だと思つた。」

と言いました。

雪斗さんは 勘違いして勝手に落ち込んでる私の姿が

おもしろかった・・・みたいです。

雪斗さんが笑うと不思議な気分だ。

笑われて恥ずかしい氣もするけど

それ以上に心が暖かくなる

「の暖かさが

しあわせ

幸せといふのかもしれない

雪ちゃんが笑うと私は幸せです。

【華月 14日 晴れ】

「最近お前笑つようになったな。」と

雪ちゃんに言われました。

その時は頷く事しかできなかつたけど

それは雪ちゃんが居るからです。

雪斗さんのお家にお邪魔してから

毎日が楽しいのです。

自然に笑うことができる。

【華月の25日 晴れ】

最近 色々な事がありました。

最初から書いてみようと思います。

雪斗さんに喜んでもらおうと

私は再び掃除人として働きだそつとしました。

ですが 「掃除人です。雇ってください。」

と 街のねじをひいたり

アイドルにならないかと言われました。

少し嘘つけて

怖かったのですが

これはお金が稼げるかもしないと想つて、

おじさんに着いてきました。

その時は役に立ちたくて

前が見えていなかったのだと想います。

そこのでは写真を撮りれるだけです

たくせんお金がもらいました。

[写真を撮られたら

ずっと部屋に閉じこめられました。

そんな毎日が続きました。

あまり泣くわくなかった。

これで雪ちゃんが喜んでくれたらと思つたら むねがわくわくしました。

あの日 帰りして貰うことお願いしたら

駄目だと言されました。

でも お金ももってかえらないと

雪ちゃんに喜んでもらえないです。

何回もお願いしたら 怒つて殴られました。

痛かったです。

殴られる事よりも 雪ちゃんに喜んでもらえる事ができない方が

痛かったです。悲しかつたです。

それから数日経ちました。

[写真を撮られ続けました。]

「…から一生出られないのかなと思つて

毎日過りました。

雪ちゃんに喜んでもらえないなら

今まで生きていた意味もないし

働く意味もない

明るい性格になつても意味も無い

雪ちゃんがいなければ

なにもない

もひびりでもよくなつました。

けれど 気付いたら私は 布団で寝ていました。

私は栄養失調で倒れたようです。

びっくりしました。そこは、雪斗さんの家だったのです。

田の前に本を読んでる雪オさんがありました。

私はすぐに、雪オさんの袖を掴んで

ポケットに入っているお財布を渡したら

雪オさんは

雪オさんは私を

強く強く抱きしめて

泣きながら 怒りました。

私は 雪オさんにお金が届けられて

嬉しいはずなのに

それよりも

雪斗さんが心配してくれたほうが

何倍も何倍も

本当に嬉しくて

叫ぶぐらい大きな声で

私は泣き崩れました。

・
・

金なんかよりもお前の方が大事だ。

ずっとずっと探してたんだ

お前を。

月那・・・

もつぢこも行くな。

・・・行かせないからな。

心配させんなよ。

・・・

空月 2日 晴天

最近は、雪斗さんの本を読むのに

夢中でした。

難しい本も頑張って読みました。

勉強です。

勉強は何か役に立つかもしれない

思つたからです。

空印 6日 曇り

あの日 雪ちゃんが寂しくならなこといつこと

お友達を連れてきました。

私は雪ちゃんが居れば寂しくないのに

不思議だと思いました。

お友達は可愛い可愛いこいつでした。

白と黒のふたりでした。

初めてのお友達でした。

雪ちゃんはお父さんみたいだから

「わわわわんが初めてのひともだら。

でも お友達に名前をつけねのは度です。

・・・ヒカルに聞いたり

「うわわに聞けばこじやん」

・・・

そ そうだったのですか！

と思い実行しました。

空月 10日 晴れ

聞こえないです。

聞いても分かりませんでした。

私がうわわさんと話している・・・話すとしこると

雪斗さんが来て

「月那・・・お前聞こえないのか？」

「 やハ 一回聴いてみぬる 」 と聴こめた。

私は聞いてみました。

「 ひやわわわわわせ ウウ・・・ウウとここあす。

「 ひやわわわわの鳴わ虹つて可愛いです。

「 シュルナード = アリスト ていつてんじやん

立派な名前です！

「 ひやわわんがそいつので

私はシェルアと呼ばせて頂く」とこぼしました。

空月12日 くもり

シェルアと庭で遊びました。

シェルアといふと本当に楽しい

私の大事な友達。 大好きです。

でも、最近雪斗さんがお仕事に忙しいのか家に帰つてきません。

寂しいけれど

私は雪斗さんに何もしてあげられない。

お仕事も手伝えない

働く事も出来ない

できる事つてなんだろ？

私ってここにいる必要あるのかな？

空月 13日 雨

雪斗さんがまだ家に帰つてきません。

心配です。

シェルアも元氣がありません。

空月1-4日 くもじつ

雪斗さんがない。

部屋がとっても静か 広い。

もともと綺麗なお部屋だから

掃除もあまり意味が無い。

何をしよう

なんだか心がすかすかする。

不安になる。

だから シルアを抱きしめて

ずっとお話をした。

シェルアも聞いてくれていた気がした。

ずっと傍にしてくれた。

空月 16日 くもり

雪斗さんが夜遅くに帰つてきました。

疲れきった表情でしたが、帰つてきて嬉しいです。

私は料理を昨日一 日中 勉強していたので

グラタンとローンポタージュを作つて食べてもらいました。

雪斗さんは前に私が 真っ黒な異物を作つても

全部食べてくれました。

そんな料理を作らない為にも練習しました。

「・・・つまこじやん」

一口食べて 雪子さんがそつまつてくれました。

その言葉で私は有頂天になりました。

料理つて素敵だな

食べてもうらえる 喜んでもうらえる

シェルアにも野菜サラダを作りました。

全部食べててくれたから おいしかったのかなあ。

シェルアも喋れればいいのにな。

今日はとっても賑やかで

私はとても幸せです。

次のページ

(紙がぐしゃぐしゃで 手は乱雑に書かれている)

そつか

そーいうことだつたんだ

寂しくならなこよつこひそひこひこりとなんだ

また 独りになる 邪魔になる

どひつよう どひつよう

どひつすれば 雪せわんば

わたしが忘れないでいてくれる?

[写真を見たら

とってもとっても綺麗な人だった

そうだよね

雪斗さんも恋をするよね

お父さんなわけがない

ずっと一緒にいるなんて

なんで思つたんだろう

だめだ　だめだ

もつすぐ捨てられる

怖い怖いこわいこわいこわい

陽月の3日に

結婚式がくる

いつ捨てられる 明日? 明後日?

いつ? いつ? いつ?

やだ やだ やだ やだ

・・・やめて

いやあああああああ

『お前の負けだ・・・モノとして一生生きる』

私の負け・・・

あの人に負けた

あの人は勝つた

雪斗さんと結婚する人

相手は・・・私に勝つたの人

・・・

誰か 時間と記憶を停めて

朝倉優歌

それか

・・・

私の息の根をとめて

第11話 月那の日記（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。
これを読んで月那と詩優の関係が分かった人も
いるかもしれません。
ですが、まだ謎の部分もあると思います。
それを次回で書きたいと思います。
次回も宜しくお願ひします。

第12話 月那と優歌

「・・・お前の相手は優歌という女だ。」

負けたらお前は人として生きられない。

だから死ぬ氣で勝て。

街長になるには人より優れていないといけない。

蒼風街の立派な街長になるために

死ぬ氣で努力しろ。

物覚えつく前から　ずっと言われていた言葉

あの人に言われ続けた言葉・・・

あの人は私の専属教師だと言つた。

とても厳しくて　恐い人だつた。

立派に働いているつて言つていた。

その人から　私の両親は別の街の街長だつて聞いた。

両親の写真も 記憶も 思い出も無い私は
理想と想像で両親を信じて

両親に会える日を信じ生きていた。

そう 私には

家族なんていなかつた。

友達なんていなかつた。

毎日毎日何かに追われていた。

武道 魔法 剣術 礼儀作法 歌劇 調理 裁縫

弦楽器 ピアノ 習字 バレエ スポーツ 外国語

・・・

数え切れない数

もっとたくさん面白い事を毎日習っていた。

休みなんて無かつた。

休める場所も無かつた。

いつも誰かに監視され生きてきた。

不器用で なにも上手には出来なかつた。

だから必死で努力した。

体がおかしくなつても

頭がおかしくなつっても

心がおかしくなつても

意味のある事だと 信じて疑わなかつた。

ただ、負けないために

あの人勝つために

それだけのために 死ぬ氣で努力した。

・・・

それが全て無駄になつた日

捨てられた日

私がモノになつた日

その時に私の専属教師が

私の本当の父だと知つた。

そして私の対戦相手 優歌 の専属教師が

私の本当の母だと知つた。

でも その日から私はモノとなつたから

私は生まれたときから 死ぬまで両親はいない。

両親として会つた事が無い。

生まれた時から両親は専属教師で

両親と気付いた時には

私はモノだったから、両親はあかの他人になっていた。

唯一の希望さえ消えた。

いや

もともと光なんて無かつたんだ

私の両親は、ただ値定めしていたんだ。

どちらが優秀か？

どちらが容姿端麗か？

どちらが強いか？

私は負けて 優歌が街長になった。

街長候補だった者がいると 住民の勢力が分かれやすい。

住民を従わせるには

誰よりも賢く

誰よりも美しく

誰よりも強い

たつた1人がいればいい。

街長候補 厳しい訓練を受けた者

つまり私 朝倉月那が

邪魔だつた。

だから私を捨てた。

寒い冬の雪の中に。

モノになつてから聞いたんだ。

私の対戦相手の氏名

朝倉優歌 は

私の6歳年上の 血の繋がつた姉 といふことを

第1-2話 月那と優歌（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。
次は詩優と月那の関係を書いつと想います。
宜しければ読んでください。

第13話 月那と詩優

雪斗さんの結婚式が来る。

その日まで 私はただ生きてきた。

植物のよひに

ただ 存在していた。

雪斗さんが幸せになれるなり

何だつて応援したい。

だから

これから何だつて努力する

どんな苦痛だつて耐えてみせる

そう思つても

決心しても

体は動かない

恐くてしかたがない

あの日から

ほとんど

食べていらない 寝ていらない

もう 体がもたないかもしけれない

涙がとまらない

・

はやく元気になつて 笑顔で

「おめでとうございます。」って言いたいのに

・・・本当だよ

心から幸せを願つてゐるんだ

優歌さんと幸せになつて下れ。

優歌さん 綺麗で優しいから・・・

優歌さんと話しているときの

雪斗さんの笑顔 見れるの嬉しいから。

雪斗さんが紹介して

優歌さんに始めて会つた時

天使みたいな人だつて思った。

そこで、ただ立ち尽くしてゐる

無愛想な私に

月那ちゃん初めまして。

私は朝倉優歌と申します。

月那ちゃんと雪斗さんと私も

暮らせる日を楽しみにしています。

月那ちゃんと仲良くしたいです。

これから宜しくね。

天使みたいな笑顔だつた。

私を1人の人間として見てくれていた事が

嬉しかつた。

昔の闘いの相手とか

本当の姉妹とか

関係なく

ただ

素敵な人だなって思つたんだ。

でも 知らなくて良かつた

優歌さんは覚えていないんだ

私の事・・・

闘いの相手

本当の妹

知らなかつたのが

救いだつた。

でも 優歌さんなら

打ち明けてもいいかもしれないつて

思つたよ。

そう

私は捨てられなかつた

2人とも

一緒に暮らそうって

言つてくれた。

嬉しさの涙が止まらなかつた。

嬉しくて嬉しくて

気持ちが溢れていつて

何もしなくても

ただ ただ

涙も

声も

全部溢れて

震えが止まらないこくらこ

心が叫ぶくらこ

生きてこむ事を忘れてしまひくらこ

生きでいて良かつたつて

心から思つた。

2人とも私に居場所をくれた。

とても

とても

みんなで過ごす日々は

暖かく幸せな居場所だった。

闇用 6日 くもり

2人の間に子どもが出来たそうです！

名前みんなで考えています。

もちろんショルアも。

楽しみだな。 会える日が。

でもね

2人の間に子どもができるから

今みたいな幸せ続かないのかもって

思つてたら。

雪斗さんが励ましてくれた。

すしい。

雪斗さんにはなんでも分かるんだなあ・・・

嬉しかつた。 ありがとう雪斗さん。

閏月 10日 はれ後くもり

名前は夢ちゃん だそうです。

雪斗さんが決め、優歌さんが賛成しました。

たくさん夢がある子に育つてほしい。

夢がたくさんあると 人生楽しいだろ。(雪斗さん談)

その後 雪斗さんが

「シルアも言つたしな。」

と、思ひつゝました。

・・・え!? やうだつたのですか!

閏月 12日 晴れ

ビックリコースです!!

シェルアの声が聞こえるようになつたのです。

第一声は

「おまよー 丹那」 でした!

「おまよー 可愛いです!!

雪ちゃん言つたら

「くー。良かつたじやん。」

雪斗ちゃんの反応でした！

閏月 15日 晴れ

最近は雪斗さんの代わりに

学校で働いています。（雪斗さんは小学校の教師でした。）

お掃除したり 給食作るお手伝いしたり・・・

同じ年の子とちよつとしゃべれました。

恥ずかしかったけど、楽しかったな。

閏月 17日 雨

雪斗さんは街長になるための勉強をしています。

「優歌1人に負担かけられない。」からだそつです。

それに、学校の教師もちゃんと続けています。

無理しないでほしいな。

優歌さんも街長として立派に働いています！

優歌さんは綺麗で優しいだけでなく

かつこいいです。憧れです！！

なので家事全般 私が担当です。

家事楽しいです！

「シェルアが掃除しますです。手伝いです。」

シェルア可愛いー／＼／＼お手伝いありがとうございます！

閏月24日 快晴

今日はシェルアと本と一緒に読みました。

その物語は、悲しい物語でした。

雲雨華という花をさがす物語でした。

花を見つければ願いを叶えてくれる・・・幻の花* 霊雨華*

ある人は お金持ちにして欲しいと頼み

ある人は 宝石が欲しいと頼んだ。

ある少女は靈雨華を見つけて、

自分の望みを叶えるより

摘み取られる花が可哀想だと思い

その一つの花を守り、育てました。

ずっとずっと守りました。

しかし、花をみつけた たくさんの人間は

その花を巡つて争いました。

たくさんの血が流れました。

少女はその花を命を懸けて

たつた一人で守りました。

けれど、少女は力尽きてしまいました。

それと同時に花も枯れました。

もう 雲雨華はこの悲しい大地には
芽生えなくなりました。

その時シェルアと約束したの。

いつか少女の代わりに 雲雨華を見つけて 育てて 守って
花畠を作れたらいいね。って話をしました。

夜

声が聞こえたの

夢の中で

『・・・じわい・・・じわいよ』

・
・
?

誰・・・ですか？

私は夢なの。みんなの夢

夢
・
・

夢うちやんなの？

うん・・・

寂しい 恐いって言つてた。

泣いてた。

「どうして？」って聞いてみたら

泣きながら

私は『幻術士』として生まれてくる。

みんなの期待 恐いの。 不安なの。

消えたい 消えたい

光は小さくなつて
消えていった。

「 驎目！！」

私は消えそうな光を掴んだ。

この光は手放したくなかった。絶対。

この光ひのうを失つたら

優歌さんも雪斗さんも悲しむ。

もちろんシェルアも私も悲しい。

「みんなが夢ちゃんを待ってるよ。」

・・・。

独りで生れるの恐い……

「そっか……そつだよね。」

恐いよ。独りぼっちなの

うん……。

分かった

「……私も」

「夢ちゃんと一緒に生まれてくるよ。」

え？

「「」の光にね。わたしの魂を溶かすの。」

「もうすると私と夢ちやんが一つになるの。」

「一緒にたら寂しくないよ。ね。」

いいの？

うん！ 私で良ければ！

・・・。

ありが・・・とう

後悔しないよ。

約束守るよ。

そして私の体は冷たくなり
永遠の眠りについた。

ばいばい。

みんな。

今まで本当にありがとうございました

朝 夢は覚め

「幻術士・・・?」

「夢は幻術士として生まれてくるのか?」

「そり・・・みたい。」

「幻師様に夢で言われたの・・・。」

雪斗は呆然として

優歌は泣いていた。

まさか自分の子どもが幻術士になるとは

思わなかつただろう。

幻術士は悲しい運命を辿る者だから。

運命 宿命 神の意志

逃れられないものだから

悲しい現実の後。

2人に追い討ちする出来事。

月那の死。

2人は心が潰れそつだつた。

冷たくなつた月那の隣にシェルアがいた。

シェルアだけは 泣かずに次の出会いを待っていた。
また会えると分かつてていたから。

月那の死

月那は月那が思っているよりも

優歌や雪斗にとって

大きい存在だった

人見知りをするけど

純粋で

不器用だけど

何事にも一生懸命で

大きな傷を抱えても

涙を隠して

いつも笑っていて

あの子の笑顔に何度も

癒されただろう

助けられただろう

幸せになただろう

・

・

その後

月明かりを無くした 2人は

夜を彷徨うように 生きていった

幸せな時間

遠く

遠くへと

夢く消えてしまった

雪斗の

笑顔は消え

優歌は絶望に墮ち

人が変わつていった

「あのね雪斗。駄菓子と思つたの……」

「……何が？」

「お腹にいる子のは、夢を追いかけてはいけないと

思つたの。」

「……」

「だつて私達はずつと幻術士にたよつていた。

幻術士がいるから、今まで私達は平和に生きてきた。

それを当たり前だつて思つてた。

・・・卑怯だよね。

なのに、この子が自分の夢を見つてしまつたら……

誰がこの世界を救つと思つ?

「この世しかないんだよ……。」この世に一人しか……。

「この世界を救えるのは……。」

「……。」

「違うんじゃないかな？」

「みんながこの世界を救えるよ！」

「協力するものなんじゃないか？」

「俺達は今までどうじつに夢を迎えるべきだと思へ。」

「でも……」この手だけが苦じむ事になるの……。?

「だから俺達ができる事は全て、夢にしてあげよう。」

俺達も夢に全て捧げよ。」

「優歌 これから頑張ればいいんだ。」

「夢の存在 否定すんなよ。」

「・・・。」

「・・・うん。分かった。」

「・・・でも決別つけていいかな。」

「？」

名前を変えたいの

この子は夢を追いかける子ではなく

人を守るために死を懸けて優先する子

‘死’を‘優’先する子

死優

詩優しゆうといふ名前にしたいの

第1-3話 月那と詩優（後書き）

読んで下さりありがとうございました。
最終回ももう少しだと思います。
次回も宜しかつたら読んでください。

第14話 蒼空と紅海

(詩優)

・・・

私と弥夢は長い長い時間を旅していた。

樹木の力 火炎の力 氷水の力 暗黒の力 疾風の力

私は 幻師様から5つの力 大幻術を手に入れた

そう

これで全て揃つた

後はこの力を解放すればいいだけ

その時に

私の魂は消滅する

・・・

けれど 後悔しないよ

だって 聞かせんとの約束だから

最後までやり遂げる

詩優として

生まれたときから

この約束を守るために 生きていたから

青い空 白い雲

吹き渡る心地よい風

詩優と弥夢は空に浮かんでいた。

目の前には、詩優と同じ年位の少年がいた。

髪は空色の青 瞳は草の葉のような綺麗な緑だった。

「・・・よくここにこれたね 「ご苦労様。」

少年は穏やかに笑いながら、一礼した。

見た目は大人しそうな少年。

空色の髪が風に靡いていた。

彼は疾風幻師だった。

「久しぶり 空相変わらず・・・だね。」

詩優は苦笑いしながら答えた。

「？」

弥夢はそんな2人を眺めている。

・・・

「・・・ははは！やつぱそうだよなー。」

少年は満面の笑みを浮かべた。

「久しぶり！詩優。」

「久しぶり！そら。」

2人はハイタッチした。

詩優は今までに無いくらい笑顔だった。

少年・・・空も幸せに笑っていた。
モラ

「よくここまでこれたよな。

詩優は幻術だとしても、そっちの子はどうやってきたの？」

人見知りのない、人懐っこい笑顔で

そらは弥夢に目を向けた。

「……魔法です。浮遊術です。」

弥夢はそらをまじまじと見て、

サラサラの綺麗な空色の髪

深く澄んだ緑色の瞳を見つめた

こんなに整った顔立ちの人は

永遠の契約以外で見たことが無かつた。
ソウルリンク

「……永遠の契約の方々って
ソウルリンク

美男美女ですね。」

せりせ少し驚いて 笑つて言つた

「えー・マジで。 ありがと。」

今度は、そらが弥夢をまじまじと見て

弥夢に近づいた。

「・・・」

「君も 可愛いんだから顔だせばいいのに」

そらは空から水色のピンを取り出して、弥夢の長い前髪を分けて

ピンでとめた。

「よっ・・・・と。」

ぱちん

「弥夢 可愛いー」

詩優は嬉しそうに言つた。

弥夢は照れながら 詩優に言つた。

「・・・ありがとうございます。」

「あの・・・そらさん。ピン もらって良いのどうじょうか?」

「もちろんです。弥夢。」

「あっがとうございます。・・・

弥夢は嬉しそうに笑つた。

「ん? そのブレスレット

もしかして 瑞雨先輩からもらつた?」

弥夢の腕には黒い十字架の

ブレスレットがついている

そらには暗黒の邪気が見えた。

「はー。瑠璃さんから頂きました。」

「へー！ 瑠璃先輩から物がもらえてるって

よほど君の事が気になつたんだね。」

「？」

「詩優ちゃんひつた事あるの？」

「ないかなー。」

「ただでさえ瑠璃先輩って

近づきにく所あるからやー。」

「瑠璃の力は凄いよねー。」

「俺が幻術士だった頃さ。」

瑠璃先輩の力・・・といつか気がすこくてさー

大幻術もうつ時 僕ふつとんだんだぜ。」

「あはは。 そうだったんだ。」

2人が笑って話している時

弥夢は疑問と驚きを

心に抱いていた。

(あの2人が凄いというけれど

瑠璃さんの力・・・私にはなんとも感じなかつた。

私が闇属性だから・・・?

・・・

ああ。

あれだからか・・・

「あの・・・そらさんも幻術士だつたんですか？」

「ああ。・・・っていうか知らなかつたんだ。

幻師はみんな元々幻術士だつたんだぜ。」

「え・・・」

「あ 弥夢。言つてなかつた・・・よね。」

「いえ。・・・平氣です。」

弥夢は心を悟られないように

静かに笑つた。

詩優は疾風の力を手に入れ

大幻術 全てを手に入れた

後は力を解放するだけだった。

「・・・今日は近くの町に泊まりましょう。」

詩優は大幻術を手に入れると

ものすごい疲労がかかるので、すぐに町に向かった。

自然に恵まれた町 フィレスト で

食事もせずに 詩優は宿屋で寝てしまった。

夜

詩優は深く寝入っていた。

キイイ

弥夢は宿屋の扉を開けた。

颯爽とした歩き方で

近くの海辺に向かった。

海辺には誰も人はいないで

海辺には 静けさと潮の香りが漂い

波立つ音が微かに聞こえた

弥夢は足を

海面に浸して、

弥夢が呪文を唱えると

海が紅黒く染まり 弥夢が海へ沈んだ。

「まつてたよ・・・ 未^{みむ}無」

そこには

暗い海の底で光る 紅い瞳の

未無の仲間が 待つていた

第1-4話 蒼空と紅海（後書き）

読んで下さりてありがとうございました！
次回は弥夢・・・未無を中心に書きたいと思します。
宜しければ見て下さい。

第15話 裏切りし者

暗い海の底

「ここは海ではなく 地獄に近い場所だった。

「ここままだと・・・死ぬぞ」

弥夢は冷たい瞳で、紅い瞳の者達に向かって言った。

紅い瞳の者達は、不機嫌そうな表情を浮かべた。

「それは お前が護衛してるからだ」

「未無だつて覚悟しているんだろ」

「ここままだつたらまた魔族は滅びるな。」

紅い瞳の者・・・魔族たちは口々に喋りだした。

だが その表情はやつれていた。

魔族とは、魔術を得意とする種族で

人からは軽蔑される種族であった。

その為 魔族は魔術を使い、たくさんの人間を殺してきた。

魔族は 油断した時や魔術を使用する時に、瞳は紅い瞳になる。

闇属性は吸収し、光属性を苦手とする。

弥夢は暗い声で語った。

「私も最初は幻術士を殺すつもりだった。なんせ魔族の仇だからな。」

瘤に障つたように魔族は口を挟んだ。

「未無……お前は魔族を裏切り 人と馴れ合っているだろ。……なぜだ？」

「幻術士……詩優様に助けられたからだ。私には あの人を殺せない。」

「あの人になら殺されても構わない。」

弥夢は迷い無く言った。

弥夢は魔族を見渡して、口元を緩めた。

「それにしても、お前ら随分やつれたな……」

弥夢はあざ笑いながら、魔族に向かつてそう言つた。

魔族たちは怒りを隠せずに

弥夢に向かつて言葉を吐き捨てた。

「幻術士の力が全て揃つて、力を持つたからだ。

今回の幻術士は光属性だから、俺達には痛いぐらい眩しいんだよー。.

…そんぐらい分かっているだろー。」

「ああ。そうだつたな…。」

弥夢は、魔族達の怒りに怖氣づく」ともなく平然と言つた。

・・・

「光が眩しいぐらい痛い」

私も魔族だが…

何かを思い出したように腕を見た。

白いフレスレット

『これ… 弥夢にあげるね。』

「これが私を守っているのかもな…」

少し弥夢は表情は少し柔らかくなつた。

だが、その表情は一瞬にして消え 冷たい瞳に戻つた。

「用件をさつさと言おう。お前達に力を貸して欲しいんだ

魔族達の空気が張り詰めた。

「…だれが裏切り者に力を貸すかよ。」

「さつさと済えろ。」

「人間と馴れ合つてろよ…」

弥夢は深いため息をついた。

「・・・お前達に有益な話だと思つが」

弥夢は用件を話し出した

魔族達はにやりと笑つた。

「...ふーん やってやひつじやん。」

その話に魔族たちは承諾した。

【未無・・・幻術士を裏切る気か やるじゃねえか】

魔族達は笑いだした。

未無の呪文により

魔族達は力を取り戻し始めた。

「んー。気持ちの良い朝だね!」

詩優は外にでて背伸びをした。

「詩優さま・・・」

「ん? 何 弥夢」

詩優はいつもの笑顔で弥夢を見た。

それに対しても弥夢は暗い表情だった。

「力はいつ解放するのですか?」

「いつ魔族を殺すのか?」という意味で弥夢は聞いた。

「もうすぐ・・・かな。」

・

「・・・そ�ですか」

心から悲しそうに弥夢は呟いた。

「詩優さま・・・今から広い草原に行きませんか?」

「草が茂つていて 綺麗だねー。」

心地よい風が吹く 広い草原だった。

「詩優様・・・」

「ん?」

『お相手願いますか・・・?』

え?

弥夢は風のよくな速さで詩優に近づき

首もとに短剣で切りつけようとしていた

第1-5話 裏切りし者（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。
詩優と弥夢の続きを書きたいと思いません。
宜しければ読んでください。

最終話 幻術士の宴（前書き）

最終話ですが、番外編を書く予定です。
読んで下さると嬉しいです。

最終話 幻術士の宴

弥夢は走り出す

今まで命を懸けて守つてきた人に

刃を向けるために

弥夢は詩優の首に短剣を切りつけようとした。

寸前の所で詩優は、空中へ舞つた。

その姿は、いつもの詩優ではなく

幼き頃から鍛えられてきた幻術士の姿だった。

2、3m跳んだ所から

足音もたたないぐらい、綺麗な着地をした。

「弥夢…どうしたの？」

芝生の上に詩優が立ち

構えもせず、隙を出したまま 詩優は話しかけた。

その姿は、いつも優しい瞳の詩優だった。

弥夢は短刀を構えたまま答えた。

「私には役目がある。…ただ、実行するだけです。」

再び弥夢は詩優に向かい走り出した。

「お前らも行け！」

弥夢がそう言つと、芝生から数えられない数の魔方陣が浮かびだし

魔方陣から、漆黒の髪・紅い瞳の者 魔族が現れた

魔族も詩優に向け襲いかけてきた。

手に武器を持つものもいれば、魔術を唱える者もいた。

軽く50を超える数の魔族いた。

詩優は囮まれた。

詩優は納得したような表情をして

「そつか…ばれちゃったんだ。」

詩優は前を見据えると、厳しく悲しげな瞳で

「闘い…好きじゃないけど、

譲れないものがあるんだ…！」

そう言つた瞬間 音速の速さで

幻呪文を唱え、幻陣を空氣に描いた。

大幻術の二 + 火炎の力 + を使つた。

幻陣は燃えるように輝き、

幻陣から炎を吐き出しながら、火竜が現れた。

「軽めにお願い！！」

詩優は叫びながら、高く高く跳んだ。

火竜は焼け付くような火花を、周りにまき散らした。

その火花によつて、魔族達は目を瞑つた。

詩優は空中に浮かびながら

大幻術の三 + 氷水の力 + を使つた。

美しい人魚が現れ、大量の水を草に撒いた。

草をできるだけ燃やさないようにするための

詩優の配慮だつた。

「なんなんだ！…あいつは…」

魔族は詩優を憎しみの瞳で睨むと

再び詩優に向かい襲い掛かってきた。

詩優は湿つた草の上に着地し、

跳んでくる、数えきれない 火の玉・電気の玉を避けた。

時には素手で跳ね返しながら、詩優は前方にいる魔族に近づいた。

前にいる魔族の武器を田掛けながら 武器の持ち手を蹴り飛ばした。

魔族の武器は詩優の正確な蹴りによつて

芝生の上に落ちていつた。

「火竜！…武器を燃やして…」

火竜は灼熱の炎で武器を燃やした。

「水もお願い！」

人魚は冷たい大量の水を、燃えている草に向け撒いた。

その瞬間、詩優は背後を取られた。

振り向くと同時に詩優は倒れた。

そこには紅い瞳 漆黒の短い綺麗な髪

着物のような服を身にまとい

白と黒のブレスレットをつけた

・・・

ずっと一緒に旅してきた

友達

弥夢がいた。

弥夢は倒れた詩優の上に覆いかぶさるよつとして

詩優の首に短刀を突きつけていた。

「覚悟…して下さい。」

冷たい瞳で詩優を見る。

それは旅をしてきた中で見たことのない瞳。

首にナイフを突きつけられても、怖気づく事もなく

詩優は紅い瞳をじっと見つめた。

「いあん…」

その言葉を聞き、やつと諦めたかと弥夢は思った。

幻術士といえど、大勢の魔族には敵かなわなかつたか。と

心の中で悟つた。

いひまでか

・・・

こんなもんなのか

あつけないな

・・・

大勢で卑怯かもしれないが

・・・

これも目的の為

・・・

「魔族つて事… 気付いてあげられなくて ごめんね」

え

詩優は涙を零した。

「ずっと我慢してたんだよね…」

「悩み…独りで抱えていたんだよね

「私と旅なんかしたくなかったのに 付き合わせちゃうじめんね

・・・

・・・違つ

違つ 違つ

「違つ…」

「私は詩優様を守りたいだけだ…！」

「本当にこんな手荒な真似したくない……」

「なんでも言つてくれなかつたんだ！！」

「一番の友達つて言つてくれたの……」

「悲しいよ・・・話して欲しかつた……」

「旅の最後は死んでしまう事……」

弥夢も涙を流した。

その姿を見て、詩優は微笑んで言つた。

私が幻術士として生きてきたのは

1人の女の子を助けたかったの

その子は私の大切な人の子供だったから…

でも、その子と私…一緒に生まれてくるはずだったのに

その子を私は追い出して生まれてきた。

その子ね幻術士として生まれるのが恐いっていうから

私が独りでも 幻術士として生きていこうって思ったの

正式にいふと 私は死ぬのではなくて 幻師になるの

そりすると この体は空く訳で…

そしたら夢ちやんにね この体を返そりと思ったの

夢ちゃんこな、もつ幻術士としてでなく

雪ちゃんと優歌さんの愛する子供として

生きて欲しかったの

でも、夢ちゃん今まで生きていないと思ったから

急に16歳の女の子として生きていくの大変だらくなつて思ったの

詩優はつっこみから本を出す

だからね この魔本書に私の記憶を残しておいたの

この本をよめば 生まれたときからの私の記憶が分かるから

生きてこくに困らないかな。

それに夢ひやん寂しへなこしな。と思つたの

でも、必要無いみたい・・・

「え…？」

詩優は本を弥夢に渡した。

夢ひやん寂しへの体が窓へのを待つていていたんじやなくて

生まれてきてくれたの

それには、今まで私を守つてくれていたの。

一緒に旅に出たしね 護衛守術士として 帰ってくれてたの

『夢りやんは弥夢だつたんだよ』

弥夢が夢りやんだつて気付いたのは

「わざわざこの村でお土産としてもひつた

白い箱の中の手紙に書いてあつたの

シェルアが教えてくれたの

でも 一応渡しておくれ

「行かないでーー。」

弥夢は詩優を掴んだ。

…やつがいたと思つたから言わなかつたんだよ

「私が詩優様を襲つたのは

幻術を封印するためだつたから…」

「やつすれば、魔族も滅びないし

詩優様も死ななくてすむと思つたから…」

弥夢が本気で私を殺そつなんて思つてないぐらい 分かってたよ

「私のせいで詩優様を殺すことなんて

できない…できません…」

…そんなことないよ。

夢ちちやんは弥夢としてずっと

ずっと守ってくれてたもん！ 充分だよ。

「いやですーー！絶対詩優様を守ると決めたんです！」

私は幻師として…ソウルリンク永遠の契約の仲間として

新しく生きるの。瑠璃も空もみんないい人だったでしょ？

もう お別れだね

弥夢は詩優を強く掴んだ。

「離れない・・・です。」

大幻術の一 + 樹木の力 +

妖精が現れ 睡眠の粉を振りまく・・・

「……！」

「嫌！いや……はなさないっ」

「ううう……」

弥夢の力が弱まつていく

魔族たちも睡眠の粉により倒れしていく

弥夢に映るのは、ぼんやりとしたした景色

涙を流し、瞳を閉じた

詩優は立ち上がった

【幻術士・詩優は5つの力

樹木の力 水流の力 火炎の力 暗黒の力 疾風の力を

力源とし、我的力を放とする】

【願いは…魔族と人が共存できる世界】

雪斗さんと優歌さんによろしくね

シャアアアアアンン

眩い光が世界を包んだ

* * * * *

・・・

やっと終わったんだね

ちょっと疲れちゃった

休んでいいかな・・・

「優・・・お疲れ様」

「頑張ったね...詩優。」

「次の幻術士が来るまで、時間はあるからゆっくり休めよ。」

「そのままで、遊びに行っちゃえ。」

「今度は幻師として よりじくなーーー。」

永遠の契約・・・
みんな

うんーーお皿葉に咲えて遊んでもいいやー。

私は走り出す

「お疲れ 月那。」

「シェルア！ 久しぶりー！」

「やつと シェルアとの約束守れるねー。」

私の旅は始まる

幻術士としてではなく

シェルアと一緒に

レイソローズ
雲雨華を探す旅へ

最終話 幻術士の宴（後書き）

読んで下せりてありがとうございますーー！

まだ作者自身も謎な部分や書き残した所
弥夢のその後などを書きたいと思います。

感想がありましたら宜しくお願ひします。 へへ

特別編 設定 資料（前書き）

日々日々に更新して書を呪わうと思っています。
日々置いて再び読んでくださると嬉しいです。

特別編 設定 資料

幻術士をお読みになられた読者様。
今までありがとうございました！！

今回は幻術士で語りきれなかつた部分や
キャラクター紹介をしたいと思います。
宜しければ読んでください。^ ^

世界観

多様な種族が存在する大陸・リールク大陸に位置する
西の国 太陽聖光国・サンクレイン では
魔術や聖霊術が法律で禁止されていない数少ない国である。
主に 人族 妖族 聖霊族 が多数を占めている。
魔族は差別を受けやすい種族である。

安定した季候で作物がたくさん採れ、比較的自然が多い国である。

幻術士とは

幻術士とは使える者は数少ない幻術を使える者である。
約100年置きに1人、幻術士が現れる。
幻術士は、神の使い、と別名で呼ばれている。
自らの命を捧げ、世界に貢献している姿が、神の使い 天使 に近
いと
人々は考えているからである。

また、人とはかけ離れた力を持つ為、神の力を受け継ぎし者 神の
使いと
呼ばれた理由が一般的である。

* 術の種類*

聖靈術 心の清き靈を操る術。

基本的には、守護する為に使用する。

極めれば多少の回復術も使う事ができる。

聖光教が信仰しており、聖光教の教徒は聖靈術を学ぶ事ができる。

一般人にも親しみやすく、使いやすい為、
聖靈術が術の中で一番使用する者が多い。

魔法 様々な使用方法がある術。

魔法学校や魔法書で学ぶ事できる。

誰もが使えるものではないが、

努力すれば、ほとんどの者が使用できる。

浮遊術や変化術など使用目的は様々である。

守術 強い衝撃からも守護できる術。

護身術は専門分野として、様々な高等学校で学ぶ事ができる。

魔法よりも高度で、使える者は数少ない。
中級守術を使うには約3年間修行をしても、
使える者は100人中15人ぐらいである。

魔術 魔族しか使うことのできない術。

攻撃目的しか使えない。

魔術は上級魔法を越す威力がある。

魔術を使えば、軽く村や町を破壊する事ができる。

魔族として生まれても使える魔族は約半数である。

幻術士しか使えない。

大小様々な本物に近い幻を創る事ができる。

幻術を攻撃目的に使うと、魔術を越す威力を持つていて、その差は歴然である。

幻術士しか使えない。

幻師によって受け継げられる。

幻師の力を精霊に託したものを幻霊といい、

幻師と契約すると幻霊を呼び出すことができる。

幻師の数だけ幻霊がいる。

幻霊の力は、地を引き裂き　天を破る事が可能な力を持っている。

* 幻術士の歴史*

1225年　初めての幻術士が現れた。

人工的環境災害により地は割れ、土は砂となり大地は枯れた。

神の使いと呼ばれた女性は、枯れた大地に命を恵みを与え、草木を芽生えさせた。

彼女を人は命の女神と呼んだ。

1388年 2代目の幻術士が現れた。

地球の平均温度が年々下がつて環境問題となつている地球低下化。このままでは大地は凍りつき生物は絶滅してしまう。だが、炎のような赤い髪の青年により、凍り付いてきた大地に太陽がまた照りだした。

1444年 幻術士の捷という規則ができた。作者は「神からの伝言により私はこの捷を書いた」と証言している。その捷は人々の未来を安心させる光となつた。

だが、その捷は作者の個人的な主觀によつて書かれているという評価も數え切れない。

1536年 3代目の幻術士が現れた。

雨が滅多に降らなくなつた。飲める水も少なく植物も枯れていきつた。

だが、蒼い髪の女性により砂漠や干からびた大地に、恵みの雨を降らせた。

冷たく綺麗な雨だつた。

1666年 4代目の幻術士が現れた。

一昨年に魔族による襲撃が起き 魔族によつて滅ぼされた町や村は数えきれない数にのぼり、魔族による征服が始まり、人々を不安にさせた。

だが、金髪の少年によつて大半の魔族が消滅し、生存している魔族は数少ない。

少年の力は恐ろしいほどの威力だつた。

1775年 5代目の幻術士が現れた。

空気感染する新しいウイルスが発見され、死亡数が増加している。病気感染により中東部を中心に広がり始めたが、空色髪の少年により、ワクチンとなる白風草が各地方に咲き始めた。白風草は風薬というワクチンが配給され、病気感染を止める事が出来た。

1889年 6代目の幻術士が現れた。

今までの幻術士は人族の為に力を使っていたが、今回の幻術士は魔族の為に力を使った。闇の森という村ができ、そこに魔族が新しく平和に暮らすことができた。

その森には誰もが落ち着きを取り戻すという不思議な効果が発揮されている。魔族が再び社会の一員として受けいられるのだろうか？

少女の良心により、魔族は荒んだ心が癒され始めてきている。

× × × × 年

・ ・

* キャラクター紹介 *

朝倉詩優

あさくらしう

月那の魂の生まれ変わり

歳 16歳 身長 157cm

髪の色 薄い茶色 瞳の色 薄い青

幻術士として生きぬいた少女。

夢との約束を守るために、厳しい幻術士としての使命を受け入れ、生きてきた。

本人曰く、攻撃幻術は苦手と自称しているが
その強さは多数の魔族にも勝る強さである。

幼き頃から幻術士として厳しい修行を受けてきたが、
温かい家庭で育つたため、性格は穏和で平和主義である。
大好きな優歌と雪斗の家族になれた事に、

本人は、嬉しさ半分 2人を騙しているようで罪悪感も感じていた
ようである。

蒼風街の街長として受け継ぎたかったが、幻術士の使命があるため
街長は諦めて、幻術士としての修行に打ち込んできた。
物心が付く頃から月那としての記憶があつたため
優歌の事をお母さん・雪斗の事をお父さんと呼ぶのは、
抵抗があつたらしい。

好きな食べ物は グラタン コンポタージュ ハーフ

好きな動物は うさぎ

夜乃 弥夢

夢の魂の生まれ変わり

歳 12歳 身長148cm

髪の色 黒 瞳の色 赤

夢の魂の生まれ変わり、月那によつて魂が飛ばされてしまった為
月那と一緒に幻術士として生きる事ができなかつた。
本人は月那に全て幻術士としての責任を負わせてしまつた為
ものすごい自己嫌悪を感じていた。

だが、1人で悩んでも仕方が無いと考え

幻術士を補佐する立場・・・幻術士を守れる力が欲しいために
魔族として生まれてきた。

けれど、魔族として生まってきた時には、夢としての記憶は
無くなつていた。

夜乃弥夢は偽名で 魔族として生きていた頃は、未無と呼ばれていた。

10歳の頃までは、魔族を滅ぼしてきた幻術士を暗殺する為に
育てられてきた。「お前に未来は無い。幻術士を殺すためだけに生
きろ。」と

父親に言われ続け、鍛えられてきていた。

その為、その頃の性格はキレやすく冷酷だった。（キレた時に綺麗な紅い瞳になる。）

父親の教育により10歳で魔族一の力を持つようになつた。（父親の力も越してしまつた。）

ある事件をきっかけに魔族の大半を殺してしまい、家族も全員失つた。

その力を見せ付けられた魔族達は未無を新しい魔族の長と認めた。10歳の頃に詩優の存在を知り、暗殺をしにいこうとするが、幻術士としての厳しい修行を目撃し、自分と近い存在という事を認識し、

自分と近い存在なのに正反対なものをもつてゐる事に興味を持つ。詩優と近づけば近づく程、自分に遠い存在と知り自分の欲しいものを持つてゐる詩優に惹かれていく。

自分を闇と認識し、詩優を光と認識している。

弥夢は優歌と詩優は元々は姉妹という事を知つていた。なぜなら詩優とは悩みを弥夢に話せる友達になつていていたからである。詩優と友達になる事で弥夢の性格はまるくなつていった。友達の助けになりたいと思い、護衛役の試験を受けた。（もちろん合格した）

護衛役として護衛守術を学ぶが、魔族の為魔術の方が比較にならないくらい強い。

宝物は詩優から貰つたブレスレットと瑠璃から貰つたブレスレットである。

瑠璃は自分が魔族と知つていても、友達になつてくれたので、弥夢は瑠璃を大切な存在と思つてゐる。

好きな食べ物は抹茶。

好きな色は 黒と白。

•
•
•

特別編 設定 資料（後書き）

読んで下さりてありがとうございます！

設定資料を書き終えたら番外編を書いひとつと思います。

特別編 設定 資料（前書き）

番外編を書いてから、付け足そつと思ひます。
田を置いて再び読んで下さると嬉しいです。^-^

少女と兎の旅のその後を書きました。
良ければ読んでください。

特別編 設定 資料

* キャラクター紹介2*

朝倉月那

あさくら

歳 10歳 身長127cm

髪の色 茶色 瞳の色 緑

生まれた頃は、本当の父と母は別の町で立派に働いていると聞き、信じ続け蒼風街の街長の娘として生まれ、生きてきた。だが、実際は月那の専属教師が父で姉の専属教師は母だった。

姉がいるが、2人が話した事は1度も無い。姉と妹 どちらを街長に受け継げさせるかで優歌とはライバルとなり、対抗意識を持ち始めた。2人は厳しい教育を受けてきたが、わずかに姉 優歌 の方が優秀だったので、優歌が次期街長となり 月那は負けた。

幼き頃から厳しい教育を受けた月那は、人より優れていた。

8歳とは思えないような礼儀を学び知識を持ち、運動能力にも優れていた。

やがて月那が、その力を發揮し、人々を惹きつけてしまったら優歌が街長として人々を纏めていても

街の住民が月那を中心として、新しい意見を持ち、街の住民の気持ちが分かれてしまう事を恐れた。

父と母は街の安全の為…独占欲の為に、月那を捨てた。他にも対策はあつただろう。

だが2人には、代々街長となれなかつた人は人ではなくモノとして扱われる教えを受け継いだ。

街の住民は月那をモノと呼ぶようになった。

専属教師（実の父）はモノとして月那を扱い、月那を掃除人として働かせていた。

掃除人として月那は体力の限界まで働かせられた。

朝早くから夜遅くまで月那を掃除人として働かせ、牢屋で寝かせられていた。

その時月那は本当の両親がいつかは助けにきてくれると信じていた。暗く狭い牢屋で願っていた。

だが、その期待を裏切る真実を専属教師から聞き、専属教師が本当の父だと言うことを知った。

月那は絶望に落ち、実の父に寒い雪の日に捨てられた。

好きな場所　月か雪が見える所

村瀬　雪斗

むらせ

歳 19歳（月那と出会った時） 身長 176cm

髪の色 銀 瞳の色 深い青

両親は聖靈宗教の指導者の為、聖靈術は人より優れていた。生まれたときから動物の声が聞こえるという珍しい体质をもつていた。

見た目は無愛想だが、人嫌いでは無い。

優歌と月那以外の前では滅多に笑わない。（人嫌い…？）

優歌とは幼馴染で小中高と同じ学校だった。
優歌の天然さとお人好しの所に惹かれる。

月那には妹のような感情を抱いている。

18歳　・高等学校で聖靈科以外の授業を受ける。
(聖靈科の授業の時はサボっていた。)

19歳　・父親の経営している聖靈宗教専門学校の中等部の教師として働く。

- ・独り暮らしを始める。
- ・月那に出会う。

20歳　・優歌と結婚（近くの教会で）

- ・雪斗のマンションで優歌も暮らす。
- ・教師を続けながら、街長についての勉強を始める。

22歳・月那の死。

- ・優歌との子供が生まれる。（詩優）

朝倉優歌
あさくらひでかずか

歳 16歳（飛び級した為 雪斗と同じ学年） 身長 156cm

髪の色 黒 瞳の色 薄い青

蒼風街の街長として厳しく育てられた。

月那と同じく両親が専属教師という事は、後になつてから知った。
月那が妹とは今も知らない。

月那が捨てられてから両親が重い病氣にかかり
幼馴染の雪斗の家で暮らす事が多くなつた。

両親の厳しい教育から解放され、雪斗の家で過ごす事によつて
笑うことが多くなつた。

飛び級は小学生の時にテストを受け進級した。

頭も良く 運動神経も良く みんなに優しく接していた為
みんなから好かれ、友達も多かつたようだ。

娘…詩優には精一杯の愛情をかけて育てた。

その結果、詩優が幻術士として生きる事を詩優自信が望んだ。

・・・

これからも幻術士は生まれ続ける
みんなが助け合わないかぎり、幸せになれない限り。
悲しい命は生まれ続ける

少女と兔

探し続けた 歩き続けた

そして辿りついた場所

丘の上の一つの樹

『あ・・・これが雲雨華?』

少女は樹に咲いている花を指差した。

「…そうだね。これなんだね。」

兎は精一杯背伸びをして花を見る。

『やつたねー・シェルアー！』

少女は嬉しくて満面の笑みを浮かべる。

「でも…これは花とこりより樹だよね。
雪雨華って花だと思ってたよ。」

『そりいえばそうだね。』

少ししょんぼりとした表情になるが、すぐに笑顔を取り戻し
大きな樹の満開の花を見上げる。

『でも綺麗な花だねー。』

「月那^{ルナ}…この樹をどうする?」

少女を兎は見つめた。

2人は花を守る約束をしていたから、
だがこの樹はもう…

『新しい幻術士が生まれてくるまで、この樹を守らうかな。』

月那は樹の木陰にいる少女に近づいた。

『あなたが、今までこの樹を守つていってくれたんですね。お疲れ
様です。』

…え。

『私がこの樹を守りますから、生まれ変わってきて下さい。その状態では魂も消えてしまいそうですね……。』

…うん。

分かった…ありがと…

少女は静かに消えていった。

* * *

「月那……あの子…お話にでてきてくれた女の子なのかな」

丘に座りながら兎に話しかける。

『たぶんそうだよね。そんな気がするね。』

少女は微笑んだ

『あの物語…実話だつたんだね。』

少女は兎にやつぱつと

立ち上がりて丘の上から世界を見渡した。

手を組んで目を瞑ると

凛とした綺麗な声で

世界に響くよつに声をだした

この樹を時がくるまで、 守ることを誓います

綺麗な自然が、 私大好きです。

人として生きた この世界が大好きでした。

この樹が身勝手な願いによつて枯れませんよつに

この世界に命と笑顔が絶え間なく 生まれ続きますよつに

特別編 設定 資料（後書き）

樹を守っていた少女は、次の連載の話に出てきます。
次の連載の話も宜しければ読んで下さい。^ ^

番外編 天使のうた

目覚めた時には、目の前に自分がいた。

現実を思い出したくなるぐらい、忘れたかった記憶が蘇る。

見なくても今の状況が分かる。

私は、詩優様の体に変わった。

詩優様が幻師となられてしまった。

守れなかつたんだ。

私の心が弱かつたから詩優様は幻術士となり
私の力が弱かつたから詩優様を守れなかつた。

…最低だ

こんな私に生きる資格なんてあるのだろうか。

死ぬ前に遣り残した事があつた。

それは、詩優様の書いた記憶書を届けることだ。

詩優様の両親…雪斗様と優歌様に届ける
そうすれば2人の心が晴れる…。

晴れるのだろうか…?

…

…

娘の死を聞いて。

蒼風街

見られている。

たくさん の 視線を感じる。

それは そ う か。死ぬはずの幻術士がこのこと
実家に帰つてきてい るんだからな。

でも、視線をあまりこちらに向けない。

こっちが 視線を 向けると田を逸らすのにな。

・・・不思議だな

「…失礼します。」

少女が大きな扉から入つてきた。

部屋は広く、豪華な家具や植物が飾られてあつた。

窓が開いていて、風が吹くたび白いカーテンが揺れている。

外は快晴で暖かい光が部屋に射して いた。

そこには、明るい部屋とは反対に重く焦りを感じている人の姿があつた。

少女の前に、優歌と雪斗が不安を表情にだしながら少女を見ている。

「詩優…なの？」

優歌が震える声で尋ねる。

少女は悲しそうに、悔しそうに呴く。

「…残念ながら詩優様はお亡くなりになりました。」

「信じてもらえないでしようが、私は詩優様の護衛役・弥夢です。」

少女は低い声で呴く。

信じられなさそうに、2人は驚く。部屋に緊張感がはしる。

「分かりやすい方法があります…。」

少女は一冊の本を抱えて、2人に近づく。

「触つてみて…下さい。」

2人はおそるおそる言われるままに手を差し伸べた。

本に指先が触ると、本から白い光が溢れ出し、2人の瞳に吸い込まれた。

一瞬の出来事だった。

2人は落ち着きがなくなり、息が荒くなる。

目には涙を浮かべ、脱力して床に倒れると叫びだした。

この叫びは、詩優様・月那さんを愛していたからだと弥夢は思った。

記憶書に触れると、詩優が生きてきた、全ての記憶が分かる。

2人は分かったのだ。詩優の深い悲しみを。心の痛みを。

少女は2人をしばらく眺めながら、

少女は本を机に置き、颯爽と部屋を出た。

詩優様を置いて私だけ幸せになるなんて
ありえない。あの人に失つてしまつたら、もう何もないんだ。

少女は魔法、瞬間移動を使い、元々いた場所、草原を歩き出した。
そこは、詩優と戦った場所で、少し前には魔族が倒れていたのだが、
今は誰もいない。

草原にあるのは、昔の自分の冷たい体があった。

少女はそれを持ち上げると、森の奥深くに埋め、自害しようつて思
い森へ向かった。

少女は森の中を進んだ。

その森は、いつも神秘的な雰囲気な森で、神が宿っている森と
呼ばれている場所だつたのだが、今は違う。

青白い光が漂つていて、森を照らしていた。
優しい光、心が安らぐような場所だつた。

天使の声が聞こえた。

優しくて、懐かしい声。

天使の詩うたが森に響く。

体中が震えて
寂しさと優しさが混ざつて、心に満ち溢れた。

少女は涙を流した。

今まで生きている内に、自然と傷ついて汚れていった心を洗い流す
ように。

汚い全ての感情を包みこんでくれた。

ここは、自分が自分でいられる場所だった。

涙する音が聞こえた。

辺りを見渡すと他にも涙する者たくさんいた。涙していない者はい
なかつた。

紅い瞳 漆黒の髪

魔族は荒んだ瞳から溢れる涙を流していた。
子供の頃に戻ったようにな。

「ありが…と」

魔族は感じた。この森はあの人があつてくれた森だと。

そして溢れる光を抱きしめた。

光も仄かな闇を包んだ。

・・・

時は流れ

魔族達の村ができた。

とても賑やかで明るい村。
野菜や果実を食料として、みんなで分け合えて、助け合って生きて
きた。

自然に囲まれ、みんなが優しい気持ちでいられる場所。
そこには心からの笑顔が溢れていた。

弥夢もその村で、子供達に囲まれ笑っていた。

弥夢は自分で生きる道を選んだ。

逃げたくなったから

新しく守りたいものができたから。

綺麗事かもしけないけれど

あなたの命…そして自分の命を無駄にしたくはなかったから。

生まれる希望はあなたの光がくれたから。

私は・・・

これからも生きていきます。

番外編 天使のうた（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

ここまで書いてこれたのは、読者様がいたからです。

心から感謝します。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1349f/>

幻術士

2010年10月17日15時10分発行